

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 27 年 5 月 10 日	
所属部局・職	霊長類研究所 生態保全分野・修士課程 1 年
氏名	武 真祈子

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
宮崎県串間市・幸島
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
生態学野外実習 (幸島実習)
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 27 年 4 月 25 日 ~ 平成 27 年 5 月 1 日 (7 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
京都大学野生動物研究センター幸島観察所、鈴木崇文氏、高橋明子氏
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真 (必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの) の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
<p>幸島は、野生のニホンザル (<i>Macaca fuscata</i>) の生息地として、島全体が国の天然記念物に指定されている。また、日本の霊長類学の発祥の地としても知られる。本実習は、そのようなサルの聖地とも呼ぶべきフィールドでの観察・実験を通して、野外研究の基礎を身につけることを目的として行われた。半谷吾郎准教授、John Sha 研究員のご指導のもと、参加した学生は修士学生が 10 人、博士学生が 3 人の計 13 人で、うち 4 人は留学生であった。実習は、各自がフィールドでテーマを見つけ、仮説を立て、それを検証し発表するという流れで行われた。基本的には、幸島の対岸にある幸島観察所 (以下、ステーション) で寝泊まりし、幸島での観察は朝 9 時半から 13 時くらいまでの間に行った。時間が限られているのは、浜で麦が撒かれるのが 10 時からであり、サルたちは 2 時間ほどかけて全ての麦を食べ終わると、森に戻ってしまうからである。ステーションと島間の移動は、漁師の方にボートで送迎していただいた。日程は以下の通りである。</p> <p>4/25 (土) 15:00 ステーションに集合。清掃、買い出し。 20:00 エクセルや R の使い方についての講義。</p> <p>4/26 (日) 10:00 幸島の浜や森を案内していただく。 14:00 ステーションでの昼食後、各自の研究計画発表とディスカッション。</p> <p>4/27 (月) 9:30 各自のテーマに沿った観察・実験を開始。希望者 9 名は島に宿泊。</p> <p>4/28 (火) 9:30 引き続き観察・実験。悪天候が予想されたため、島内泊組も島から退散。</p> <p>4/29 (水) しけのため島には渡れず。データ整理、統計解析、スライド作成。</p> <p>4/30 (木) 12:00 研究発表会。16:00 希望者で都井岬へ。野生の馬を観察。 19:00 宴会。</p> <p>5/1 (金) 11:00 清掃後、解散。</p>

私は、2つのテーマについて研究を行った。プランAは、浜に人が寝転がり、その上に餌を置いたらサルはどの部位から餌を取っていくのか、また餌を取る速度は寝転がる人が違えば変化するのか、というものである。仮説としては、足などの末端部から取っていき、胸や顔は避けるのではないかと考えた。また、見慣れない人（半谷先生や私）と見慣れた人（鈴木さんや高橋さん）では、見慣れた人からの方が、取るスピードが速いのではないかと考えた。このプランは半分冗談のつもりだったが、先生方が背中を押してくださり、実験にも快く協力してくださったおかげで実行することができた。メインに行ったのはプランBで、サルが採食中に顔を上げて周囲を警戒する行動（Vigilance）に着目し、サルの順位間で採食速度とVigilanceの回数を比較した。予想としては、高順位のサルの方が、低順位のサルに比べてVigilanceに割く時間が少ないため、短い時間でたくさんの麦を食べられるのではないかと考えた。現地での解析や発表はプランBについてのみ行った。二つの研究については、それぞれ論文形式のレポートにまとめる予定である。

ここでは結果は割愛するが、実験計画を練っていくプロセスは非常に勉強になった。どんな考察をしたいのか、どのような統計解析をするかを考えた上で、抽出するデータを決めることが重要なのだと改めて実感した。このことは、学部での卒業研究における私の反省点でもある。今回は、考察までの見通しがある程度調査前にできていたおかげで、調査や解析がスムーズに流れていったという印象だ。それも、数々のアドバイスをくださった半谷先生や高橋さんのおかげである。私の漠然としたテーマを、きれいに洗い出して明快なプランしてくださったお二人の力はすごいと思った。研究者になるにあたってはそれを一人でやらなければならない。道のりは長く険しいと感じた。今後、論理的な考え方や統計の知識をもっともっと身につけていく必要がある。なお、論文形式にまとめるまでが実習なので、最後まで頑張りたい。

また、野外研究においては、共同生活や自炊も重要な一面である。今回の実習は、そのさわりを体験するという意味でも有意義であった。普段それなりに自炊はしているが、お腹を空かせた仲間たちや先生が待っている中、大量の食事を作るという状況には慣れておらず、終始あたふたするのみであった。実習中、一番体力が削られたのは食事の準備だったのではないと思う。だが、全員協力体制で作った食事は毎回とてもおいしく、楽しいひとときだった。空き時間には海で泳いだり、ゲームをしたりして、同期生や留学生との交流を深めることができたのも、大きな収穫であった。個性的で楽しい学友に恵まれたことに感謝したい。

以下、実習の様子を写真で紹介する。



左：幸島へ上陸。サル達が出迎えてくれた。 右：サルを観察する学生と学生を観察するサル。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書
(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



左：プラン B の調査風景。食べた麦の個数と Vigilance の回数を両手のカウンターで数えた。
右：島内泊したメンバーで記念撮影。



左：着の身着のまま海に入った結果。右：岩場でくつろぐサルの親子。

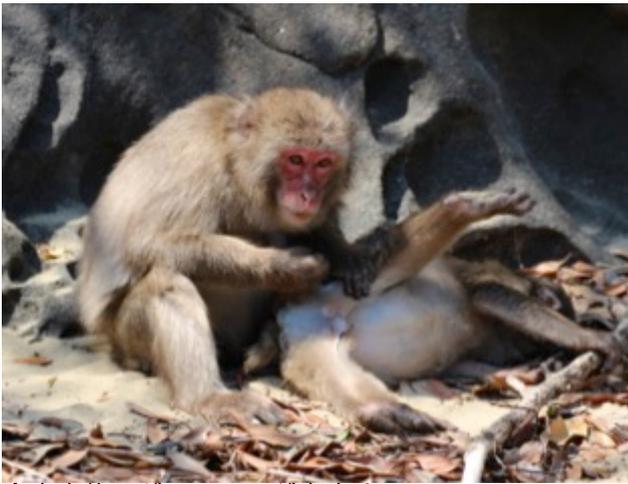


幸島の浜を海側から見た風景。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書
(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



左：データ解析と発表準備に追われる学生達。右：半谷先生お墨付きの豪華な食事。



食事を終えグルーミングをするサル。



都井岬の野生馬の親子。



高橋さんに教えていただいた植物達。

6. その他 (特記事項など)

本実習は、PWS リーディング大学院の助成を受けて行われました。また、熱心なご指導を賜りました半谷先生、Johnさま、サルの個体識別から植物の同定に至るまで多大なご協力をいただきました、幸島観察所の鈴木さま、高橋さまにも心から御礼申し上げます。ありがとうございました。